

いつ、どこに出しても恥ずかしくない子どもの育成をめざして

— 基礎・基本的な学習時間の特設とその実践をとおして —

前マドリッド日本人学校 校長

青森県弘前市立和徳小学校 校長 齊 藤 章

キーワード：基礎的学習の時間の特設，人間力の育成

1 はじめに

マドリッド日本人学校は、ここ10年来児童生徒数が30名前後で推移し、かつて150名も在籍していた頃に比べると隔世の感がある。子どもたちの学力は、総じて中位から高位に集中しており、学習意欲も旺盛である。反面、知育・徳育・体育のバランスから見た場合、様々な課題も見え隠れしており、したがって、「生きる力」と言う面において非力な感があった。このような現状で、全校の3分の2を占める小学部の児童がその柔らかい感性を磨き、持てる資質を高めるためには、小学校教育の本質である知・徳・体の基本的事項の確かな定着を図ることが肝要であると考え。また、それは海外子女の宿命でもある「転出」に際し、いつ・どこの学校に行ってもすぐに適応できる力にもなるという仮説のもと、平成19年度から取り組んだその実践を紹介する。

2 本校の実態

本校は前述のとおり、30名前後の小規模校であるが、その3分の1程度が中学部生徒である。

小職が赴任した2006年4月にまず感じたことは、教育課程が中学部主体に組まれているということであった。小中併置の小規模日本人学校であれば教員定数の事情からも当然ありがちなこととは言え、3分の2を占める小学生を中学校主体の教育課程に組み入れ、日課が組まれていることに教職の大半を小学校で過ごしてきた小職には違和感があり、小学校教育の特性に対する理解が欠如している感を持った。とりわけ、日本人学校としての異文化体験等の教育の特色は認められるものの、本来、小学校で教えるべき基礎・基本的な事項の具体的指針が示されておらず、個々の教師に任されたまま日々の活動が進められており、小学校教育の特色でもあるきめ細かな指導という点においても改善する余地を強く感じた次第である。こうした要因には、前述のとおり、学力面のみをみた場合総じて高い水準を維持しており、総論として小学校教育の課題が取り立てて提起されてこなかった経緯を感じた。現にこの計画を示した時、教職員や保護者の一部から本校に基礎教育は不要との声があがったことから伺われる。しかしながら、極わずかとは言え、基礎学力不足にあえぐ児童も存在し、また、知・徳・体のバランスのとれた子どもの育成には現状を見直す抜本的な改革が必要と強く感じた次第である。さらに、当然ながら小学校教育が成り立ってはじめて中学校教育が存在するにもかかわらず、中学校教育が先にありきの体質が校内の一部にあり、こうした改善も不可欠であると感じた。

3 実施にあたって

実施に当たっては、本校の中・長期教育計画を策定した上で、当面の課題克服のための教育課程編成の基本方針（別掲資料1参照）を教職員並びに保護者に説明し、理解と協力を求めた。また、これに先立ち児童生徒の基本的生活習慣の実態を精査するためのアンケート調査を児童生徒のみならず、保護者の眼から見た児童生徒の基本的生活習慣の定着度を調査するため、同様のアンケートの協力を依頼し回答を得た。

さらに、学校外部評価（対象：保護者）の評価項目を大幅に改善し、細部にわたって評価をうけ精査の上、できることから教育課程に位置づけた。

4 具体的実践

(1) 「朝読書の時間」並びに「基礎的な学習時間」の特設（小学部）

従来の始業時間を15分早めて8時40分とし、日課表についても右の資料2のとおり小学部に「朝読書の時間」並びに「基礎的な学習の時間」を特設し、読み・書きを中心とした学習の時間を保障することとした。

(2) 補充学習の時間の特設（中学部）

中学部においてはそれぞれの課題に即して、知力の向上を目指す時間を特設し（資料2）、正規の授業とは別に年間で約116時間を確保することとした。

(3) スポーツタイム（全校体育）の特設

「継続してつける確かな体力」をめざし、体育科の1単位時間を週4回に分け、持久走・縄跳び・剣玉等を実施することとした。

(4) 思いやりと協働の心を育てる体験活動の実施

小学1年から中学3年までが常に行事等の活動をともにする本校において、いわゆる異学年交流をとおして、思いやり、協働意識、連帯感や友情を育むなど、豊かな人間性を育てる機会とした。

(5) 家庭との連携による協働体制の再構築

家庭との連携強化はこれまであげた教育実践の効果を上げるためには不可欠なことと考え、再構築することとした。

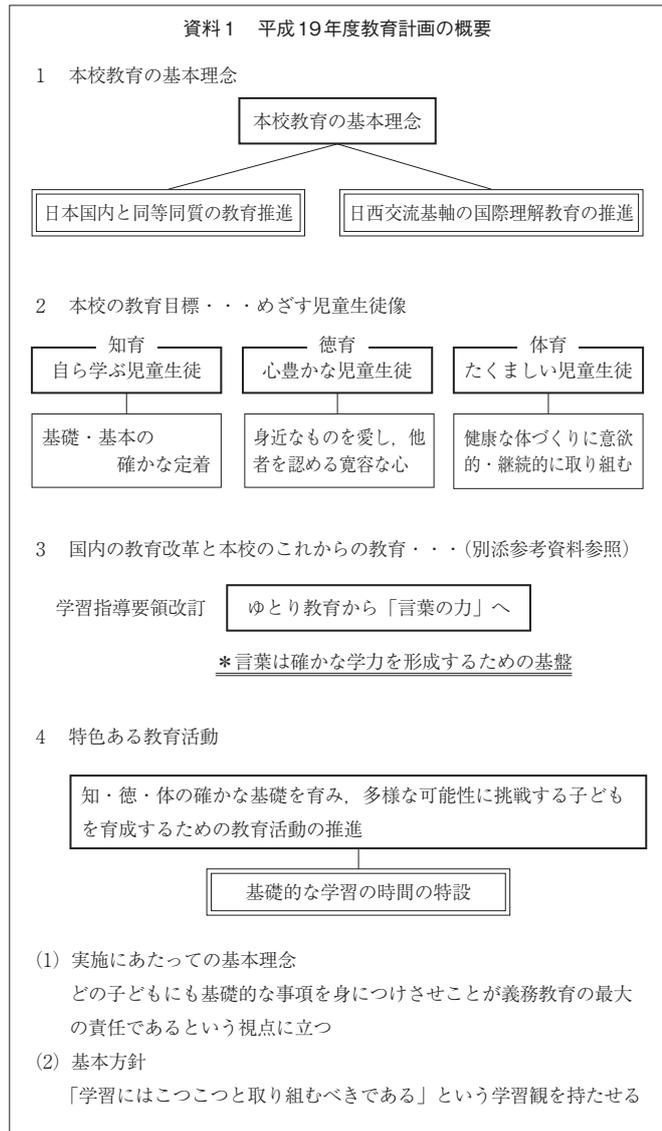
具体的には、教育課程の実施に際しての変更点を深く理解してもらうための説明責任と結果責任を果たすこと。また新たな活動として、日曜家族参観や校地清掃整備奉仕作業日を設け、主に父親が学校に関わる機会を増やした。

(6) 小学部の基礎的項目の達成度を確認する手だてとして教師評価（資料3）と児童による自己評価をさせた。

5 成果と課題

(1) 成果

2年間にわたり基礎・基本的な事項の確かな定着をめざし、そのための時間を特設し実践してきた



資料2 平成20年度日課表

マドリッド日本人学校

時刻	時限	月	火	水	木	金
8:25		職員出勤（月曜のみ職員朝会）				
8:40		児童生徒登校				
8:40 8:55	朝活動	朝の会（健康観察等） 朝読書タイム（小学部）				
8:55 9:10	基礎的な学習の時間	漢字	視写	漢字	音読暗唱	視写
(8:45) (9:10)	補充学習（中学部）	数 学	国語(1)	個人課題	国語(2)	英 語
9:15 10:00	1校時					
10:10 10:25	業間活動	スポーツタイム	全校集会	スポーツタイム		
10:25		中休み				

が、基本的にこの時間は特別な事情がない限り毎日実施を試みてきた。したがって、この時間における本校のねらいや教師たちの思いが子どもたちの中にも自然と根付き、日課に定着したことは目的達成にまずもって効果的であった。とりわけ、朝読書、基礎・補充学習、そして全校体育であるスポーツタイム等午前の日課の流れは本校の特色ある教育活動でもあり知・徳・体のバランスのとれた児童生徒育成に必ずや結果を出せるという仮説のもと、教職員の英知を結集させて実践してきた取り組みである。この2年間の実践で子どもたちにも浸透し、明らかにその効果はあったと確信する。以下、各活動の具体的な成果をあげてみた。

資料3 平成20年度 基礎的な学習の評定票（5段階評価）

分野	スポーツタイム						朝 読 書					
	1		2		3	4	1	2	3	4	5	6
評定 項目	関心・意欲・態度		技 能		体力向上が見られた	自己の向上・成就感を持てた	関心・意欲・態度	本を読めるようになった	使える言葉が豊になった	朝の10分間を有効に使えた	集中力がついて落ち着いてきた	読書で生活のスタイルが変化した
児童名	持久走	縄跳び	ダンス	けん玉	持久走	縄跳び	ダンス	けん玉				
1												
2												
3												
項目学年評定												

① 朝読書活動（小学部）

この活動では基本的に朝読書の「定番」である、「毎日、みんなで、好きな本を、ただ読むだけ」を実践してきた。本校でも朝読書は以前から実践していたが、「毎日」になったのは、これら一連の基礎・基本的な事項の定着を図ることになった2年前からである。これは言うまでもなく読書が基礎学力定着には欠かせない活動であり、また「毎日」続けることが効果的であると確信し、いわゆる「人間力」を培う大きな柱であるととらえることであった。本校の調査では、本校児童は総じて読書意欲が高いという数値が出ていたが、その効果は言語能力向上にとどまらず、集中力を高めたり、精神面への成長にも大きな影響を与えるなどの相乗効果を十分感じるに至った。

尚、1、2年生では、朝読書の時間に限らず、別途保護者がボランティアで読み聞かせを実施し、読書への興味・関心を引き出す手だてとして実践してきた。

② 基礎的な学習の時間（小学部）

ここでは主に「国語力」の確かな定着を図ることを目的に実践してきた。

言うまでもなく国語力がすべての教科の基礎ということを念頭に、教えるべきことはきちんと教えるという理念のもと実践した。

資料4 基礎的な学習の時間の内容（小学部）

	月	火	水	木	金
1年	読み聞かせ	しりとり	ひらがな練習	ひらがな練習	俳句
2年	漢字練習	しりとり	漢字練習	音読練習	俳句・一言日記
3年	俳句づくり	漢字練習	漢字練習	問題プリント	短作文
以上	言葉遊び(隔週)				

資料4は2年目の各学年の実践内容である。基本的には全学年が「鉛筆の正しい持ち方」から始め、ひらがな・カタカナ・漢字の正しい筆順、それに伴い丁寧に字を書く等、学年発達に関係なく児童一人ひとりのこれらの定着の有無を確認し、必要に応じて補うことを実践した。本校の児童は学習能力が高く、知識も豊富な傾向にあるが、こうした能力と鉛筆の間違った持ち方・筆順や粗末な字体等とは必ずしも反比例するとはいえない実態が本校にはあり、こうした取り組みは当然保護者からも支持される結果となった。

また、音読・暗唱等は「百マス計算」同様に学習の『準備運動』的な発想で取り組ませ、子どもたちの脳の活性化を図ることも意図にあったが、当然言語能力を高める効果もあった。

③ 補充学習（中学部）

この学習の本来の目的は、生徒の自学自習を基本に各自の能力に応じて補充的・発展的学習に取り組みせ確か

資料5 補充的学習の主な内容（中学部）

な学力の定着を図ることにあった。しかし、1年目は資料5のとおり教科を設定し、各教科担任がそのねらいに基づいた学習内容、方法を個に応じた決定し、指導する体制でスタートさせ、徐々に生徒の自主的学習へと移行させていった。2年目は5教科に縛られすぎると「自学自習」のバランスをとるのが難しいということで主要3教科に絞り、しかも国語は語彙力・表現力の向上、数学は基礎・基本の徹底、英語はレベルのアップとし、目的を明確に

(1年目)

	月	火	水	木	金
1年生	読書	数学	理科・社会選択	国語	英語
2年生	個人課題・読書	数学	理科・社会選択	国語	英語
3年生	個人課題・読書	数学	理科・社会選択	国語	英語

(2年目) 全学年共通

	月	火	水	木	金
教科	数学	国語(1)	個人課題	国語(2)	英語
具体的内容	前年学年復習 授業内容復習	授業に関する活動 俳句・作文	国語は漢字練習	話す活動	英語検定学習 英語スピーチ

して取りませ効果をあげることができた。特に25分間という長すぎ短すぎの時間内で集中して取り組むことで学習効率も上がり、ひいては成就感を得てさらなる学習への意欲となり、高校受験にも好影響を与えた。

④ 全校体育（スポーツタイム）

本校でこれを設定した理由は、体力向上以前に子どもたちの運動不足解消にあった。本校の児童生徒は海外在住という環境から、登下校時はスクールバス利用もしくは保護者が送迎することとなっており、体力テストにおいても持久力や瞬発力が平均値を下回るという結果が出ていた。しかし、元来本校の児童生徒の運動能力が高かったこともあるが、毎日10分程度の持久走、縄跳び、エアロビクスなどを取り入れ実践したところ、実施8ヶ月後の校内駅伝で前年度比で個々の記録が軒並み伸び、駅伝記録も驚異的な更新を果たした。まさに効果観面であった。

2年目は、剣玉をスポーツと位置づけ、マンネリ化を防ぐため多様な取り組みを始めた。持久走にしる、剣玉にしる、これらの実践は子どもたちに継続して取り組むことの大切さを気づかせる機会となった。

(2) 課題

児童生徒数が減少する中（21年度は18名）、その実態に即して一連の特設の時間をより有効に活用するための創意工夫が必要と考える。また、内容が単純明快で取り組みやすい反面、2年間実践してきたことを踏襲するだけではいずれマンネリ化を招き、その効果が薄れていくことが懸念される。とりわけ、この取り組みの中心ともいえるべき「基礎的な学習の時間」の活用は、少人数化する中で一律同じ課題で取り組む方法に疑問が出てくる可能性があるが、それはそれで改善策を講じるにしても「教えるべきことはきちんと教える」時間として教育課程に位置づけ、子どもたちの人間力を育むことにとって価値ある有効な時間であってほしいと願う。

6 おわりに

わずか3年の勤務で学校経営者として自らの教育信念を在外校に定着させることはなかなかの困難なことであることを感じた。国内においても、新参者の校長が校内改革なり新たな取り組みを提案すると少なからず反発を買うことが往々にしてあるが、在外校は全国から集まる有能且つ強い個性を持つ教師集団で構成されていると言っても過言でない現状で、反発のパワーも大きかった。と同時に、日本は広い、その土地土地に異なった文化があるように、行事のしきたり一つとっても都道府県ごとに微妙な相違があり、様々である。

改革に向け教育課程に着手したとき、小職の説明不足もあり一部の教師たちの抵抗にあったが、改革の1年目を終えたとき、最も精力的に動いていたのがその抵抗していた教師だった。万全な経営体制をしくまでには至らなかったが、そんな小職に最後は協力してくれた全国からの「つわものたち」に感謝したい。